View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

国立国語研究所学術情報リポジトリ

若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ

著者	高木 千恵
雑誌名	日本語科学
巻	16
ページ	25-46
発行年	2004-10-30
URL	http://doi.org/10.15084/00002129

『日本語科学』16(2004年10月) 25-46 [研究論文]

若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ

高木 千恵
(大阪大学大学院生)

キーワード
関西方言，否定辞，ネオ方言形，言語変化のタイプ

要 旨

若年層の関西方言では，動詞否定形を作る否定辞に，方言形～ン・～ヘンおよび標準語形～ナイの三つのバリエーションが存在する。談話資料をもとにそれぞれの使用実態を分析すると，(1)～ン・～ヘンの選択には語彙的制約・音韻制約・文中における位置が関わっている，(2)基本形では～ヘンが，-kaQ 形では～ンが多用される傾向にある，(3)新形式 -ku 形が使用されている，(4)存在動詞「ある」の否定表現がアラヘンとナイの併用からナイ専用へと移行している，(5)「～ている・～てある」相当形式の否定表現では標準語形が方言形を凌駕している，ということが明らかとなった。標準語との接触という観点から考えると，否定辞使用に見られる言語変化は，〔A〕新形式の受容／拒否の選択，〔B〕新形式受容／旧形式維持の方法の選択，という二つの手続きを踏んでいる。〔A〕には，①新形式の受容，②混交形の形成，③新形式の拒否，の3種の方略があり，〔B〕には，(i)取替え，(ii)棲み分け，(iii)淘汰，(iv)維持，の4タイプが存在する。

1. はじめに

関西方言の否定辞に～ンと～ヘンの二つがあることはよく知られている。～ヘンの出自を辿れば，「(～し)はしない」という強意の否定であり，そのことから，両者には意味的な違いがあると言われてきた。前田(1955:303)はその差異を「強い打消し(強消し)」「弱い打消し(弱消し)」「本来の打消し」「本来の強消し」といった言葉で整理し，高橋(1974:18-19)や村内(1962:400-401)，西宮(1982:339)は，～ン・～ヘンの使い分けにはムード・人称的な対立が絡んでいると指摘している。しかしながら，高木(1999:88-90)では，少なくとも若年層においてはそのような区別が失われており，意味的に同一であることが示されている。

これら二つの方言形否定辞に加えて，若年層では，標準語形否定辞の～ナイも使用されることがある。すなわち，若年層においては，～ン・～ヘン・～ナイという三つの否定辞がバリエーションとして存在していることになるが，それらが具体的にどのように用いられているのかは明らかではない。また，伝統的な連用形である～ナンダ・～ヘナンダに代わって～ンカッタ・～ヘンカッタが用いられるなど，否定辞には新しい変化が見られるが，従来の研究では個別的な事象として指摘されるにとどまり，それぞれの理論的な位置付けはなされなかったように思われる。

以上の問題点を踏まえ，本稿では，関西方言の動詞否定形を取り上げ，若年層における否定辞

の使用実態を詳細に分析し，そこから，標準語との接触による変化のあり方について考察する。以下，本稿で扱う資料の概要および分析方法について2節で述べ，三つの否定辞(～ン・～ヘン・～ナイ)の使用実態について3節で分析・考察する。4節では，否定辞の使用実態に基づき，関西若年層に見られる言語変化について，方言体系内の変化と接触による変化とに分けて論じる。最後に5節で，まとめと今後の課題について述べる。なお，～ヘンには，～ヒンという音声的変異があるが，本稿では～ヘンで代表させることとする。

2. 資料の概要と分析方法

2.1. 資料の概要

本研究では2種類の談話資料を用いる。一つは，(A)平成9～10年度文部省科学研究費補助金・萌芽的研究による「関西における『ネオ方言』談話の収集」(研究代表者：真田信治)の一環として1993年および1996年に収録されたもの，もう一つは(B)筆者が個人的に1997年に収録したものである。(A)は，真田・井上・高木(1999)として一部公開されているが，本研究では未公開資料も分析対象としている。インフォーマントは，(A)26人(男性14人・女性12人)，(B)44人(男性20人・女性24人)の計70人で，いずれも1972年～1977年に生まれ，関西で言語形成期を過ごした大学生(当時年齢19歳～24歳)である。話者の出身地は滋賀・京都・大阪・奈良・兵庫の各地に及ぶが，本稿で問題とする否定辞使用に関しては地域差がないと考えてよいと思われる[1]。談話は同性2人1組による自由会話で，飲食店内や大学構内などさまざまな場所で収録されている。録音時間は短いもので約20分，長いもので約40分，いずれも事前に了解を得て録音されている。

2.2. 分析方法

2.2.1. 用例の抽出

文字化された談話資料から否定辞を含む発話をすべて抜き出し，形式や用法ごとに整理・分類した。その際，否定辞に前接する動詞については，本動詞・補助動詞の区別をしなかった。例えば，「来ない」「持って来ない」という用例が得られた場合，いずれもカ変動詞否定形と扱っている。ただし，「いる」「ある」については，本動詞と補助動詞とで否定形に違いがあるため，それぞれを別に数えた(3.5節参照)。また，「ある」の否定表現として用いられる形容詞のナイについても用例を収集した。

談話に現れた否定辞は2,173例で，その内訳は，動詞否定形が2,033例，可能・受身の助動詞(～レル・～ラレル)否定形が140例であった。他の助動詞の用例は見られなかった。本稿では助動詞の否定形は扱わず，可能動詞否定形68例も対象外とした。よく知られているように，関西方言には可能の否定表現として「可能助動詞否定形(イカレヘン・ミラレヘンなど)」と「可能動詞否定形(イケヘン・ミレヘンなど)」とがある。可能動詞否定形は，可能助動詞否定形との対比によって論じるべきであると考え，本稿では扱わないこととした。なお，形容詞ナイの用例は496例であった。

2.2.2. 形態による分類

本研究では，否定辞の形態に注目し，それぞれを「基本形」「-kaQ 形(Q は促音を表す)」「-ku 形」の三つに分類した。基本形は，いわゆる終止形および終止形と同形のものを指す。-kaQ 形は，過去表現「～ナカッ-タ」や仮定表現「～ナカッ-タラ」のような，「カッ」という形態を持つ活用形，-ku 形は「～ナク-テ」「～ナク-ナル」など，「ク」という形態を持つ活用形のことである。標準語であれば，前者を「タに続く形」として「タ形」，後者を「テに続く形」として「テ形」と呼ぶことができるが，関西方言では，「イカ-ンカッ-テ(行かなくて：過去)」のように，標準語でいうところの「タ形(タに続く形)」が「テ」に続くことがあり(高木 2000)，「カッ」を含む活用形を「タ形」と呼ぶことは適当でない。よって本研究では，否定辞の連用形を指す用語として -kaQ 形，-ku 形という名称を用い，「タ形」「テ形」という用語は，「否定辞連用形

表1　基本形・-kaQ 形・-ku 形の分類基準

《1》	基本形：いわゆる終止形および終止形と同形のもの。「～ナイ」「～ン」「～ヘン」。	
(1)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}。	〈言い切り〉
(2)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}わ。	〈文末詞〉
(3)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}だろう。	〈助動詞〉
(4)	親が言えば，塾に{イカン／イカヘン}こと(は／も)ない。	〈否定〉
(5)	いつの間にか塾に{イカン／イカヘン}ようになる。	〈変化〉
(6)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}と言っている。	〈引用〉
(7)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}から，怒られた。	〈理由〉
(8)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}で，怒られた。	〈理由：テ形〉
(9)	塾には{イカナイ／イカン／イカヘン}けど，一生懸命勉強する。	〈逆接〉
(10)	塾には{イカナイ／イカン／イカヘン}し，家でも勉強しない。	〈並列〉
(11)	弟は塾に{イカン／イカヘン}で，妹は行った。	〈並列：テ形〉
(12)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}と，親に怒られる。	〈条件〉
(13)	塾に{イカン／イカヘン}でも，勉強は出来る。	〈譲歩〉
(14)	a. 塾にイカナイデ，遊んでいる。	
	b. 塾に{イカン／イカヘン}ト，遊んでいる。	〈付帯状況〉
(15)	塾に{イカン／イカヘン}で(も)いい。	〈許可〉
(16)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}といけない。	〈当為〉
(17)	塾に{イカナイ／イカン／イカヘン}子供は少ない。	〈体言〉
《2》	-kaQ 形：「～ナカッ-」「～ンカッ-」「～ヘンカッ-」という形態を持つもの。	
(18)	昨日は塾に{イカナカッ／イカンカッ／イカヘンカッ}た。	〈過去〉
(19)	塾に{イカンカッ／イカヘンカッ}て，怒られた。	〈過去：テ形〉
(20)	塾に{イカナカッ／イカンカッ／イカヘンカッ}たら怒られる。	〈仮定〉
《3》	-ku 形：「～ナク-」「～ンク-」「～ヘンク-」という形態を持つもの。	
(21)	弟は塾に{イカナク／イカンク／イカヘンク}て，妹は行った。	〈並列：テ形〉
(22)	塾に{イカナク／イカンク／イカヘンク}て，怒られた。	〈理由：テ形〉
(23)	親が言えば，塾に{イカナク／イカンク／イカヘンク}(は／も)ない。	〈否定〉
(24)	いつの間にか塾に{イカナク／イカンク／イカヘンク}なる。	〈変化〉
(25)	塾に{イカナク／イカンク／イカヘンク}ても，勉強は出来る。	〈譲歩〉
(26)	塾に{イカナク／イカンク／イカヘンク}て(も)いい。	〈許可〉

＋タ」あるいは「否定辞連用形＋テ」という形を指す場合に限り用いることにする。なお，関西方言では，「～ン-デ」「～ヘン-デ」のように基本形によってテ形を作るのが伝統的な形だが，今回の談話データには，「～ンク-テ」「～ヘンク-テ」といった -ku 形によるテ形がみられた。-ku 形の集計にはこれらの形式も含まれている。

形態による否定辞の分類基準および具体例をまとめると，表１のようになる。

このように分類は，意味・用法によらず形式の異同のみに着目して行った。したがって，同じ用法であっても形態が異なれば別のカテゴリに分類されている。例えば(8)(22)のようなテ形による理由節の場合，「イカナイデ・イカンデ・イカヘンデ」は基本形，「イカナクテ」は -ku 形の用例に数えている(テ形の各用法と否定辞の関係については3.3節を参照)。なお，(1)～(26)は便宜上の作例であり，～ナイ・～ン・～ヘン全ての実例が得られたわけではない。また，《2》-kaQ 形に相当する伝統的な方言形式には「イカナンダ」「イカヘナンダ」などがあるが，談話資料中に用例がなかったため，表には挙げていない。

2.2.3. 三つの否定辞が自由変異とならない場合について

～ナイ・～ン・～ヘンはどのような場合にも互いに交替可能というわけではない。方言形否定辞の使用にはいくつかの語彙的制約が存在するし，標準語形～ナイには，方言形にはない独自の用法がある。これらはいずれも，動詞否定形の分析(3.1節～3.3節)には入れなかった(表２)。

表２　対象外とした用例

《1》 語彙的制約：方言形否定辞のうちどちらか一方でしか表せない／表しにくいもの
　〈1〉 存在動詞「ある」の否定形アラヘン(アレヘン)　cf. *アラン
　〈2〉 スカン(好きではない)，アカン(だめだ)など慣用的な表現　cf. *スカヘン
　〈3〉 「要る」「知る」の否定形イラン，シラン（高木 1999:85）cf. ?? イラヘン，?? シラヘン
　〈4〉 「～ている」「～てある」相当形式の否定表現～テヘン　cf. ?? ～テン
《2》 独自の意味機能を持って用いられる～ナイ
　〈1〉 運用的に「禁止」を表現する場合（高木 1999:88）
　　(27) ［禁止表現として］そういうことは{カカナイ／#カカン／#カカヘン}。
　〈2〉 丁寧体と共に用いられる場合
　　(28) 私には{ワカラナイ／?? ワカラン／?? ワカラヘン}です。

なお，表２《1》の「方言形否定辞のうちどちらか一方でしか表せない／表しにくいもの」のうち，〈1〉「ある」の否定形は形容詞ナイと，〈4〉「～ている・～てある」相当形式の否定表現は標準語形と，それぞれバリエーション関係にある[2]。これらについては，個別に取り上げて考察する(3.4節，3.5節)。

3. 談話に見る否定辞の使用実態

談話に現れた動詞否定形における否定辞使用を，基本形・-kaQ 形・-ku 形という形態ごとに見ると図１のようであった[3]。

図１によれば，基本形・-kaQ 形における標準語形使用率はそれぞれ6.7%，4.2%にすぎず，

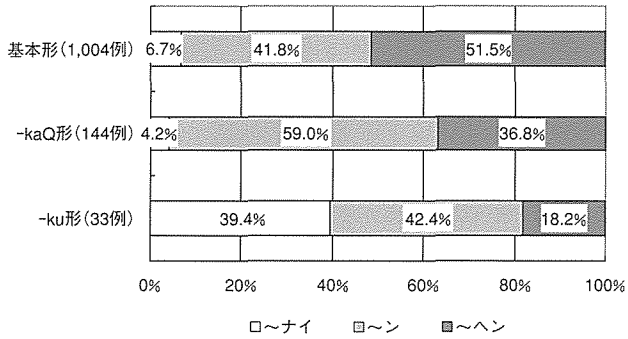

図1　動詞否定形における否定辞の内訳

方言形否定辞(～ン・～ヘン)が圧倒的多数を占めている。そのうち，基本形では～ヘンが～ンを上回っているが，逆に-kaQ形では～ンがもっとも多く使用されている。-ku形は総数が33例しかなかったが，伝統方言にはない～ンク-・～ヘンク-という形式が現れている点が注目される。

以下，～ナイ・～ン・～ヘンという三つのバリアントの用いられ方について，前後の承接関係や動詞のタイプなどを基準として分析してゆく。3.1節では動詞否定形における否定辞の基本形に焦点を当て，続く3.2節で-kaQ形を，3.3節で-ku形を取り上げる。3.4節では形容詞ナイをバリアントとして持つ存在動詞「ある」の否定形について，3.5節では「～ている・～てある」相当形式の否定表現について個別に分析・考察する。

3.1. 動詞否定形における否定辞基本形の使用実態

まず，動詞否定形を作る否定辞のうち，基本形1,004例について分析する。図1でみたように，基本形では方言形否定辞が多数を占めていたが，ここでは，二つの方言形否定辞の使用分布について，(1)動詞の活用型(3.1.1節)，(2)後続形式(3.1.2節)，(3)動詞の拍数(3.1.3節) に焦点を当てて分析する。

3.1.1. 動詞の活用型と否定辞の関係

図2は，各否定辞の使用実態を動詞の活用型ごとにみたものである。

二つの方言形否定辞の使用率には，動詞の活用型によって顕著に差が見られる。すなわち，五段動詞では～ヘンよりも～ンの使用率が高いが，一段動詞，カ変・サ変動詞では～ヘンが多用されている。なかでも一段動詞では，～ンの使用率が目立って低くなっている(10.9%)。

この，一段動詞に～ンが少ないことの要因としては，一段動詞否定形のもつ音韻的制約が挙げられる。高木(1999:83-84)によれば，関西方言の場合，一段動詞＋否定辞ンの後に/d/, /m/, /n/音が続くと動詞の終止・連体形の撥音便形と同形となってしまうことがあるため，そのような環境では，否定辞は通常～ヘンが用いられる。

(29)　部活で　毎日｛a. ハシン／b. ハシラン／c. ハシラヘン｝デ。　〈五段動詞〉

(30)　ここのバスは　時間通りに｛a. クン／b. コン／c. コーヘン｝ナ。　〈カ変動詞〉

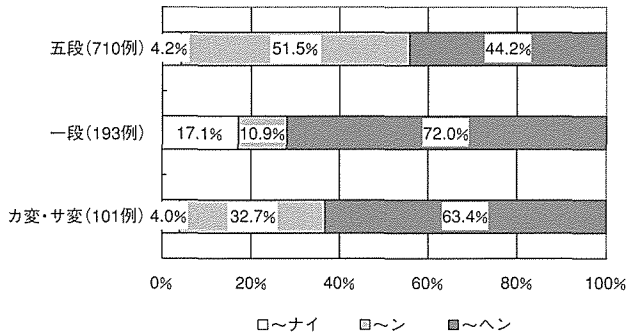

図２　動詞の活用型と否定辞の使用状況：基本形

(31)　帰ったら　絶対　勉強｛a. スン／b. セン／c. セーヘン｝ノニ。　〈サ変動詞〉

(32)　俺は　立ち泳ぎ｛a. デキン／ b. デキン／ c. デキヒン｝モン。　〈上一段動詞〉

(33)　あの子は　牛肉を｛a. タベン／ b. タベン／ c. タベヘン｝ネン。　〈下一段動詞〉

(a. 肯定撥音便形，b. ～ンによる否定形，c. ～ヘンによる否定形)

(29)～(31)に示したように，五段動詞やカ変・サ変動詞の場合には，肯定形撥音便(29)a，(30)a，(31)a と ～ンによる否定形(29)b，(30)b，(31)b とは形が異なるため，意味の混同が起こることはない。しかし一段動詞では，(32)(33)に示したように，肯定形撥音便と ～ン否定形とがまったく同形となってしまい，同音衝突が起こる。デキンモン，タベンネンなどは，「出来ないもん」「食べないんだ」ではなく「出来るもん」「食べるんだ」として解釈されうる。否定形であることを明確にするためには(32)c や(33)c のように ～ヘンを用いる必要がある。これが一段動詞における否定辞使用上の音韻的制約で，一段動詞では，～ンと ～ヘンとがつねに交替可能というわけではないのである。今回のデータでも，/d/，/m/，/n/ 音が後続し，動詞の終止・連体形の撥音便形と動詞否定形がともに現れうる環境にある一段動詞否定形は38例得られたが，～ンによる例は１例も見られなかった[4]。若年層においても音韻的制約が働いていることが窺える。

ところで，音韻的制約を受ける環境にない場合でも，一段動詞否定形における～ンの使用数は155例中21例しか見られなかった。その割合は13.5%であり，一段動詞以外の動詞の否定形における ～ンの割合(641例中341例＝53.2%)に比べるとひじょうに低い。ここから，一段動詞では，使用できる環境に制限のある ～ンを避け，どんな環境においても使うことのできる ～ヘンを多用する傾向にあるといえる。すなわち，音韻的制約が，その制約を受けない環境における一段動詞の否定辞使用にも影響を与えていると考えられるのである。

なお，各活用型における標準語形使用率に目を向けると，一段動詞に占める割合が突出していることがわかる。五段動詞，カ変・サ変動詞における ～ナイの使用率は４%程度であるのに対して，一段動詞では17.5%である。これについては3.1.3節で考察する。

3.1.2. 後続形式と否定辞の相関

次に，動詞否定形に後続する形式があるか，ある場合それはどのような文法的・構文的特徴を

表3　後続形式による分類

《1》 後続するものがない
　〈1〉 言い切り：主節末で，文末詞などが後続しない言い切りの形。(例文(1))
《2》 後続するものがある
　〈2〉 文末詞：主節末で，文末詞が続く。(例文(2))
　〈3〉 用言後続
　　〈3-1〉 助動詞：「だろう」「みたいだ」といったいわゆる助動詞が後続。(例文(3))
　　〈3-2〉 否定：否定を表す～コト(ワ／モ)ナイが続く。(例文(4))
　　〈3-3〉 変化：変化構文をつくる～(ヨーニ)ナルが後続する。(例文(5))
…… 以上，主節末 ……
　〈4〉 引用節：「～と言う」「～と思う」など引用の形式によって導かれる節。(例文(6))
　〈5〉 従属節1：従属節の中でも相対的に従属度が低いもの。理由の副詞節，逆接の副詞節，並列節。(例文(7)，(9)，(10)，(11))
　〈6〉 従属節2：従属度が相対的に高い従属節。条件節，譲歩節，付帯状況の副詞節，テ形理由節。(例文(12)，(13)，(14)，(8))
　〈7〉 許可・当為：「～て(も)いい」「～しないといけない」という表現。(例文(15)，(16))
　〈8〉 連体節：名詞・形式名詞が後続する。(例文(17))
…… 以上，従属節 ……

※表中の例文番号は表1の例文に相当する

備えているかという2点に着目して否定辞基本形の使用実態を分析する。まず，動詞否定形に後続するものの有無によって二分し，後続するものがある場合を七つに分類した（表3）。

表3のうち，〈1〉～〈3〉は主節末，〈4〉～〈8〉は従属節における否定辞使用である。表1にも挙げたように，〈6〉〈7〉の用法を持つ形式としてほかに -kaQ 形(過去テ形)や -ku 形も考えられるが，ここでは基本形の用例のみにしぼって分類を行った。上記の8類に分けた否定辞の使用状況が図3である。

各否定辞の使用状況から，〈1〉～〈8〉のグループはそれぞれ，「～ヘンの使用が半数を超えるもの」「圧倒的に ～ンが多いもの」「～ンと ～ヘンとが同程度用いられるもの」の三つに大別できる。まず〈1〉～〈5〉は，～ヘンが半数以上を占めている。それに対して〈6〉〈7〉は ～ンが圧倒的に多く，〈8〉は ～ンがやや多いものの，方言形の使用率が同程度である。

〈1〉と〈2〉～〈5〉の結果が似通っていることは，後続形式のない「言い切り」と文末詞や助動詞といった後続形態のあるタイプの否定辞使用に大きな差がないことを示している。すなわち，「後続の有無」それ自体は否定辞使用を決定する主要因となっていないとみることができる。
～ンの使用率が高い〈6〉〈7〉は，具体的には次のようなものである。

(34)　なんか　女の人が　行方不明なんやろ　今。そ，そう　ナランで《ならなくて》　良かったな｛笑｝。[B21女][5]　〈6〉理由：テ形

(35)　俺なんか，でも，イカンでも《行かなくても》　許してくれそうな　もんやなー。[B22男]　〈6〉譲歩

(36)　昼は　授業は　イカンと《行かずに》？[B19女]　〈6〉付帯状況

(37)　そんな，ノランでええ《乗らなくていい》やん　別に。[B23女]　〈7〉許可

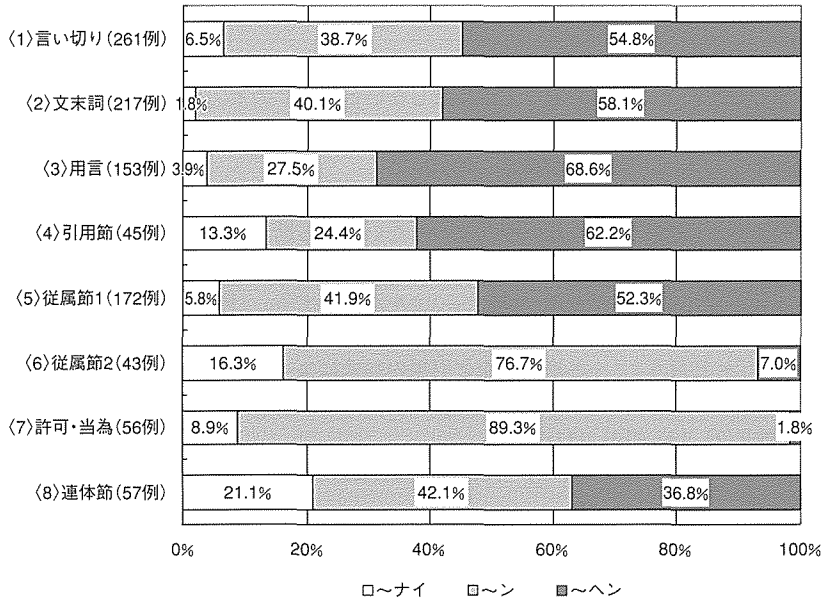

図3　後続形式の類別に見た否定辞使用

(38)　ほんまは　イカンでもええ《行かなくてもいい》んやろ。[B22男]　〈7〉許可

(39)　一応　だから　学科の　勉強も　センとあかん《しないといけない》やん　あかんかった　時の　ためにー，[B19女]　〈7〉当為

〈6〉〈7〉は従属度の高い従属節およびその形態を含むモダリティ表現だが，～ヘンの占める割合は他のカテゴリに比べると極めて低い。～ヘンは，(～シ)ワセヌという強意の否定表現に由来する形式であり，(～シ)ワセヌ＞(～シ)ヤセン＞～ヘンと形を変える中で，強めの意味を持たない否定表現へと変化したものである。(～シ)ワセヌは，否定意志や否定判断を強めていう表現なので，もとは，話し手の心的態度が表される主節末においてよく用いられる形式であったと考えられる。この特徴が今も残存し，従属度の高い従属節における～ヘンの使用を抑えているものと思われる。また，〈6〉〈7〉の形式の慣用性を考えると，従属度の高い従属節では今後も～ンがほぼ専用されるのではないかと思われる。上例でみたように，〈6〉〈7〉に属するのは～ント(＝～ないと，ないで)，～ンデ(モ)(＝～なくて(も))という形式であり，「否定辞～ン＋助詞」がひとまとまりの表現となって定着しているとみることができる。先行研究では，前田(1955:306-307)が「～ンの慣用性」としてこれらの例を挙げているほか，郡(1997:27)にも同様の指摘がある。

最後に〈8〉の連体節についてだが，前田(1955:306-307)には，体言に接続する場合には～ンのみが用いられるという記述がある。しかしながら，今回の結果を見ると，～ンが～ヘンよりも多用されてはいるものの，～ン専用とは程遠い。同じ従属節であっても，〈6〉と違って連体節には～ヘンの使用が許容されているのである。連体節の場合は後続する名詞が無数にあるため，「～ン＋名詞」をひとまとまりと捉える意識が低く，強めの意味を失った～ヘンの侵入が容易であったのだと考えられる。なお，〈8〉では標準語形の占める割合が他より高くなっているが，そ

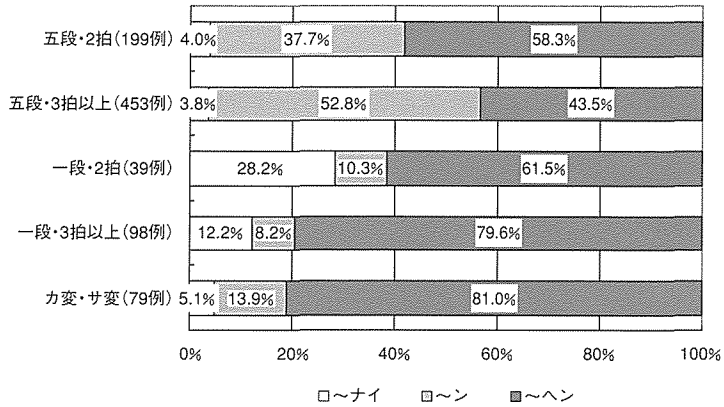

図4　動詞の活用型・拍数と否定辞基本形使用の相関

の理由については現在のところ明らかでない。

〈1〉～〈8〉の結果は，～ン・～ヘンの使用には「主節末か従属節内か」が関わっていること，従属節内については従属度の度合いも関係があること，を示唆している。このような否定辞使用の差異は動詞の活用型にかかわらず見受けられ，～ンをきらう傾向の強い一段動詞でも〈6〉〈7〉の用例では～ンが多用されている。

3.1.3. 動詞の拍数と否定辞の関係

3.1.1節の図2で動詞の活用型別に否定辞の使用状況を見たが，五段動詞では，一段動詞やカ変・サ変動詞と違って～ンの使用率が～ヘンよりも高かった。それに対して一段動詞では～ンの使用が極端に低く，それに代わるようにして標準語形～ナイの使用率が高くなっていた。それぞれの要因を探るため，動詞の活用型に加え，動詞の基本形の拍数を変数としてそれぞれの使用率をみると，図4のようであった。なお，集計にあたり，3.1.1節および3.1.2節で「～ンあるいは～ヘンが固定的に用いられる」と指摘した環境にある用例136例は分析対象から除外した。従って用例総数は868例である。

図4からは，～ンの使用が五段動詞の3拍以上の語に偏っていること，～ナイの使用が一段動詞の2拍語に特に多いことがわかる。

拍数が3拍以上の五段動詞を個別に見ると，～ンを多用しているのは「わかる」1語だけであった（ワカラン192例，ワカラヘン124例）。「わかる」を除いた3拍以上の五段動詞における否定辞使用率は，～ナイ：～ン：～ヘン＝7.0％：36.4％：56.6％で，2拍語と変わらない。「わかる」に～ンが多用される原因は現段階では明らかでないが，この結果から，「わかる」を除けば，基本形でもっとも多く用いられる否定辞は，動詞の活用型や拍数にかかわらず～ヘンであるということができる。

次に，一段動詞で標準語形使用率が高くなっている点について考察する。図4によれば，五段動詞やカ変・サ変動詞における～ナイの割合が5％程度であるのに対して，一段動詞3拍以上

の語では12.2%，2拍語ではその2.5倍近い28.2%となっている。

2拍語に～ナイが集中する要因として，一段動詞2拍語の語幹の特殊性が挙げられる。方言形否定辞～ヘンを使用した場合，一段動詞2拍語の動詞語幹は以下のような形をとる。

(40) あんまり　キーヒン《着ない》な。[A20女]

(41) 会っ，てる《会ってる》わけじゃないからー　学校でも　まったくー　顔　ミーヒン《見ない》からー，[B21女]

(42) 誰も　デーヘン《出ない》しな。[B21女]

(43) 目覚まし　鳴って　止めてから　また　ネーヘン《寝ない》？[B19男]

このように語幹が長音化するものを長呼形と呼ぶが，これは一段動詞2拍語およびカ変・サ変動詞の否定形にのみ現れる形であり，動詞の活用体系の中では特殊な形態である。したがって，話者の記憶の負担を軽くしようという内的な動機によって類推平準化(analogical leveling)が起こり，長呼形をとる～ヘンが避けられるということは十分に考えられる。しかし，3.1.1節で述べたように，非長呼形語幹をとる方言形否定辞～ンには音韻的制約があり，一段動詞では使用が避けられる傾向にある。現に一段動詞2拍語における～ンの使用率は10.3%で，～ナイより低い。「長呼形語幹の回避」と「音韻制約の回避」という二つの要因が，一段動詞2拍語での標準語形の使用を引き起こしているのだと考えられる。

ところで，カ変・サ変動詞も同じく～ヘンで長呼形をとるが，～ナイの使用率は5.1%と低い。これは，カ変・サ変動詞が「長呼形語幹の回避」からも「音韻制約の回避」からも自由であるためと考えられる。カ変・サ変動詞には一段動詞のような音韻制約がないので，方言形～ンが回避される必然性がない。また，カ変・サ変動詞では活用形ごとに語幹そのものが異なるため，そもそも類推平準化が推進されない。さらに，変格活用の動詞は長呼形そのものにもバリアントがある(キーヒン・ケーヘン・コーヘン，シーヒン・セーヘンなど)。このような複雑な活用体系では，語幹を統一しようという動き自体がそもそも生まれてこないのだと考えられる。

3.2. 動詞否定形における否定辞 -kaQ 形の使用実態

次に，否定辞 -kaQ 形についてみてみよう。-kaQ 形は，表1の《2》に挙げたように，過去形・過去テ形，仮定形として用いられる形式である（過去テ形については高木(2000:47-62)に記述がある)。談話に現れた144例の -kaQ 形を動詞の活用型ごとに分類すると図5のようであった。

144例のうち，過去テ形～ンカッテ・～ヘンカッテの用例は4例(いずれも五段動詞，～ンカッテ3例・～ヘンカッテ1例)しか得られなかった。以下では，過去形・仮定形として使われた -kaQ 形について分析する。図5に見るように，-kaQ 形では標準語形否定辞は少なく，もっぱら方言形否定辞が用いられている。今回の談話資料では，方言形否定辞の過去形・仮定形としては，標準語の干渉を受けて生まれたネオ方言形(neo-dialect, 真田 1987:26-27)である -kaQ 形だけが出現し，伝統的な方言形式である～ナンダ・～ヘナンダといった形式(以下「伝統形」と呼ぶ)は1例も見られなかった。動詞否定過去形において，伝統形が衰退し，代わって-kaQ 形が用いられるようになったことは，山本(1982:222)ほか多くの研究者によってこれまでに指摘されて

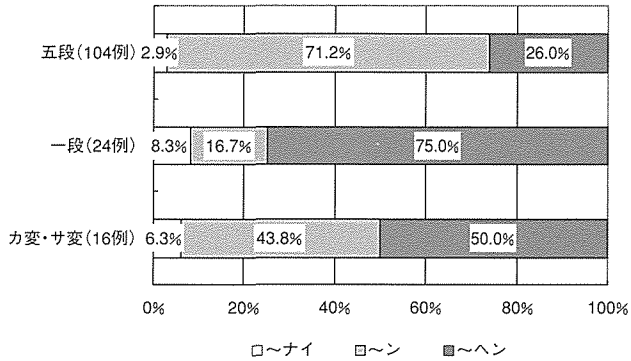

図5　動詞の活用型と否定辞の使用状況：-kaQ 形

いる。真田(1988:36)や真田・岸江(1990:20-23,28-29)，宮治(1995:56-57)などでは若年層における新形式の浸透が示されているが，今回のデータにも，ネオ方言形が若年層に定着していることがよく表れている。

図5を基本形の結果図2と比較すると，動詞の活用型にかかわらず，-kaQ 形では～ンの使用率が軒並み高いことがわかる(五段動詞51.5%<71.2%，一段動詞10.9%<16.7%，カ変・サ変動詞32.7%<43.8%)。とくに五段動詞では～ンの使用率が70%を超えている。～ヘンではなく～ンに使用が傾くのは，やはり標準語との対比によるものと思われる。標準語形ナカッタと方言形とを比べてみると，ンカッタは拍数が同じで，ンをナに置き換えれば標準語形ができる。そのために，{標準語：方言}＝{なかった：ンカッタ} という対応関係が生まれ，ンカッタが多用されるのではないかと思われる。ただし，一段動詞における～ンの使用率は依然として低いことから，基本形における音韻的制約が，制約のない -kaQ 形にまで影響していることが窺える。

五段動詞の場合，～ン・～ヘンは意味的にも同一で，「知る」「要る」「ある」などいくつかの語を除けば，どの動詞にも双方の形式を使うことができる。つまり，標準語の「～なかった」に対応するバリアントが二つ存在するわけだが，この，-kaQ 形における～ンの多用は，-kaQ 形を一形式に統合しようとする変化の方向性を表していると考えることもできる。図6を参照されたい。

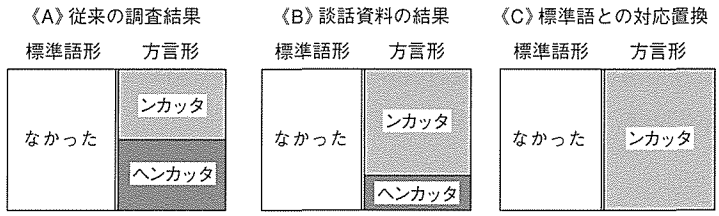

図6　五段動詞の結果にみる -kaQ 形の統合

真田・岸江(1990:20-23,28-29)や宮治(1995:56-57)など先行研究で行われたアンケート調査の結果では，-kaQ 形における否定辞使用は，～ンカッタと～ヘンカッタとが拮抗している《A》のような状態か，あるいは～ヘンカッタの方が優勢であるような状態と考えられていたが，今回

扱った談話データでは，～ンカッタが優勢な《B》の状態であった[6]。標準語との対応関係の透明性の高まりを考えると，今後は《C》の状態に近づいていくことが予想される。むろん，否定辞として～ヘンがあり，一段動詞のように～ンをきらう傾向にある動詞がある以上，五段動詞でも～ヘンカッタが根強く使用されることは予想され，完全に《C》のようになるとは言いがたいが，～ンカッタ使用のさらなる増加は十分に考えられるだろう。

3.3. 動詞否定形における否定辞 -ku 形の使用実態

続いて，否定辞 -ku 形の分析に移る。前節でみた -kaQ 形におけるネオ方言形の出現は指摘されて久しいが，-ku 形に関する調査研究はあまり行われてこなかった。表1でも少し触れたが，伝統的な方言形否定辞のテ形の形式は，～ヘン-デ，～ン-デといった基本形＋テ(デ)である。ところが，今回の談話資料では，～ンク-テ，～ヘンク-テなどの新しい形式が確認された(図1を参照)。-ku 形の用例は総数33例と少ないが，そのうち～ナク-という標準語形が13例であるのに対し，～ンク-，～ヘンク-という方言形 -ku 形が20例ある点が注目される(～ンク-：14例，～ヘンク-：6例)。以下ではまず，新形式である方言形 -ku 形の用法について，基本形と比較しつつ3.3.1節で検討し，その成立背景について3.3.2節で考察する。

3.3.1. 方言形 -ku 形の用法

-ku 形を用いる表現には〈1〉並列節，〈2〉理由節，〈3〉変化構文，〈4〉否定，〈5〉譲歩節，〈6〉許可，といった複数の用法がある(例文は表1《3》の(21)～(26)参照)。2.2.2節でも少し触れたが，〈1〉〈2〉〈5〉〈6〉の表現は伝統的には基本形＋テ(デ)によって表される(例文(11)，(8)，(13)，(15))。〈3〉〈4〉の表現も関西方言では基本形によって表され，～ンコト(モ)ナイ，～ン(ヨーニ)ナル，などのような分析的な表現を用いる(例文(4)(5))。若年層の談話資料を見ると，以上のような用法をもつ形式として方言形 -ku 形と基本形とが併存している(-ku 形20例，基本形62例)。先に見た方言形 -kaQ 形は伝統形を駆逐していたが，方言形 -ku 形は -kaQ 形ほどまだ定着していないようである。そこで，談話に現れた -ku 形(～ンク-・～ヘンク-)と基本形(～ン-・～ヘン-)の用法をみてみると，図7のようであった。

図7では，用例数が少なかったため〈3〉変化構文と〈4〉否定を「用言」として便宜上まとめている。この図によれば，〈1〉並列節，〈2〉理由節のような，相対的に従属度の低い従属節に -ku 形が多く，〈3〉〈4〉のような用言が続く場合はほぼ同数程度，〈5〉譲歩節や〈6〉許可の表現では基本形が圧倒的多数となっている。以下に実例を挙げる。

[-ku 形] 20例

(44) んーでー，飲み会ん　時も　あたし《私》　ほっとんど《ほとんど》　シャベラヘンクッテー《喋らなくて》，[B24女]　〈1〉並列

(45) そう，40万も　かけてー[卒業旅行に]　行く　気に　ナランクテー《ならなくて》[B23女]　〈2〉理由

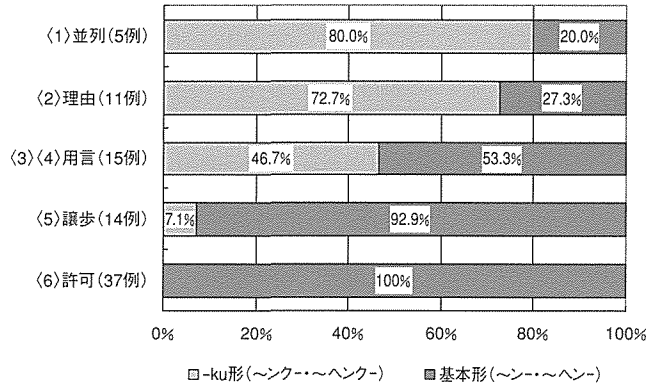

図7　方言形 -ku 形・基本形の連用用法

(46)　うちの　とこ[駐輪場は]　あれやで　ずっと　開けっ放しやで，人は　オランクなる《いなくなる》けど。[B20女]　〈3〉変化

(47)　ゆわれても　ワカランクない《わからなくない》？[B21女]　〈4〉否定

(48)　ふんでー《それで》，普通　ワカラヘンクッテモ《わからなくても》なー[B24女]　〈5〉譲歩

[基本形] 62例

(49)　俺ら　どちらか　いうと　あんまり　[一緒に]イーヒンでさー，それぞれが　勝手に　おる　っていう　時間が　長いからなー。[B21男]　〈1〉並列

(50)　え，Sちゃんも　一点　タランで　落ちたん？[A20女]　〈2〉理由

(51)　誰も　イーヒン　なんのは《いなくなるのは》　いいんか。[B21女]　〈3〉変化

(52)　でも　こっちかって《こっちだって》　ワカランことない《わからなくない》　飲み屋なんかー[B23女]　〈4〉否定

(53)　勉強　センでも《しなくても》，いけるで。[B19男]　〈5〉譲歩

(54)　ほんまは　イカンでもええ《行かなくてもいい》んやろ。[B22男]　〈6〉許可

否定辞基本形の分析(3.1.2節)で見たように，〈5〉〈6〉は，～ンが安定して用いられ，～ンデモという形が慣用表現として固定している用法である。全体の傾向を言うには得られた用例数が少ないが，-ku 形が，〈5〉〈6〉以外の用法でおもに用いられていることは指摘できるだろう。用法ごとに -ku 形と基本形が棲み分けていると見ることもできる。

3.3.2. 方言形 -ku 形の成立事情

ここで，方言形 -ku 形の成立について考えてみたい。真田(1987:26-27)に指摘があるように，方言形 -kaQ 形 ～ンカッ-・～ヘンカッ-の誕生は標準語の影響を受けたもので，伝統形の ～ナン-・～ヘナン-という特殊な形を含む活用から形容詞型の活用への変化である。しかしながら，-kaQ 形が成立しただけの段階では否定辞の活用体系そのものが形容詞化したわけではなかった。

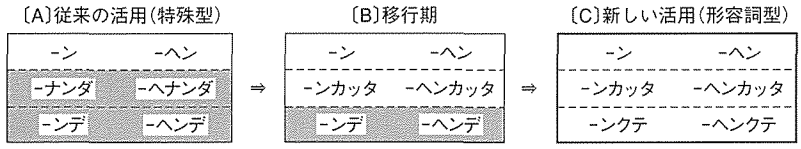

図8　否定辞活用体系の形容詞化

図8に示すように，-kaQ形が定着した結果，活用体系の整合性への欲求が高まり，-ku形が生まれたと考えられる。-ku形が現れたことで，活用体系の形容詞化はさらに1段階進んだといえる（高木 1998:44）。

ところで，〈6〉と同じく慣用表現といえる〈3〉変化構文および〈4〉否定の表現では，15例中7例が-ku形であった（例文(46)(47)参照）。従来の表現は「基本形＋（ヨーニ）ナル」「基本形＋コトナイ」のように分析的で，標準語形との差異が大きい。標準語形との対応を単純にしようという動機が，-ku形の成立を促したものと思われる。すなわち，｛標準語形：方言形｝＝｛～なくなる：～ンクナル，～ヘンクナル｝，｛～なくない：～ンクナイ，～ヘンクナイ｝という対応置換がはたらき，形容詞型への変化を促進していると考えられるのである。

3.4. 存在動詞「ある」の否定形式

3.1節～3.3節では動詞否定形における～ナイ・～ン・～ヘンという三つのバリアントについて考えてきたが，ここでは，存在動詞「ある」の否定形について考えたい。標準語には「ある」の否定形「あらない」は存在せず，形容詞の「ない」がうめあわせ的に用いられるが，関西方言にはアルの否定形アラヘン（アレヘン）と形容詞のナイの両方が存在する。言い換えれば，「ある」の否定表現としてはアラヘンとナイとがバリエーション関係にある（形容詞ナイは，形の上では標準語と同形である）。しかしながら，若年層の談話には，アラヘンの用例はわずかに6例現れたのみであった。それに対して形容詞ナイの用例は496例と非常に多く，若年層におけるアラヘンの衰退の著しいことが示された結果となった。

［アラヘン］6例

(55)　｛笑｝関係　アラヘン，地震と。［A22男］

(56)　コピーする　暇　アレヘン。［B20男］

(57)　全然　会話　アレヘン。［B20男］

(58)　［ATMが］アレヘンもん。　銀行　閉まっとん《閉まっているの》。［B20男］

(59)　そんなん　アレヘンっちゅうねん。｛笑｝［B21男］

(60)　ごめん　十円　アラヘン。［B21女］

［ナイ］496例

(61)　着てく　とこ《着ていくところ》　ナイねん。［A20女］

(62)　ふーん。バイト　変えたいわー。変えたいけど　ナイわー　なんか。［A20女］

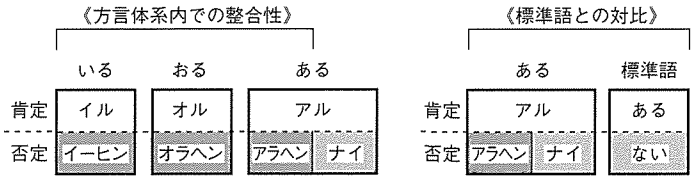

図9　存在動詞「ある」の否定表現の変化

(63)　卒論　ナイんやろ。[A21男]

(64)　そう「入った　時点で　すでに　上」って。ただし　就職先　ほとんど　ナイ　って　言うとったで《言っていたよ》。[A21男]

同じ意味を表す複数の形式が整理されて一つに絞られることは珍しいことではないが，ここで注意したいのはその整理のされ方である。アラヘンではなくナイが選ばれたということは，「動詞肯定－動詞否定」という方言に特有の対立ではなく「動詞－形容詞」という標準語と同じ対立が選ばれたことになる。

図9に示すように，アル－アラヘンという対立のあり方は動詞一般の肯定－否定と同じで，方言の体系内でみれば，アル－ナイよりも整合性の高い対立である。ところが，これを標準語と対比させてみると，アル－アラヘンは特殊な対立ということになる。

このように，標準語と対比させてはじめてアラヘンの特殊性が浮き彫りとなり，アラヘンの衰退という変化が促進されるわけである。アラヘンとナイの併用からナイ専用へという変化は標準語の干渉抜きには説明しにくい。標準語との接触があるからこそ起こることであり，若年層の方言体系の変化に標準語が関与していることの表れといえよう。

3.5.「～ている・～てある」相当形式の否定表現

では次に，「～ている・～てある」相当形式の否定表現について考える。2.2.3節の表2にも示したが，「～ている・～てある」相当形式の否定表現の場合，方言形ではふつう(～シ)テンではなく(～シ)テヘンが用いられる。というのは，(～シ)テンには，後続音が /d/, /m/, /n/ の場合に肯定(～シテル)の撥音便形と同形になって同音衝突を起こす，「(～し)たのだ」の意の(～シ)テンとも同形である，という音韻的制約があるからである。今回のデータでも，(～シ)テンによる例は次の1例のみであった。

(65)　で　それを　計算に　イレテンとー《入れていないで》　作ってしまったらー，シューって　なくなって{笑}。[B22女]

したがって，「～ている・～てある」相当形式の否定表現におけるバリアントは事実上(～シ)テナイと(～シ)テヘンの二つである。(～シ)テンによる1例を除いた否定辞の内訳を形態別に見ると図10のようであった。

3.1節から3.3節で分析を行った動詞否定形の場合，ネオ方言形という新しい形式は見られるものの，いずれの活用形においても方言形否定辞が多数用いられていた。ところが，「～ている・

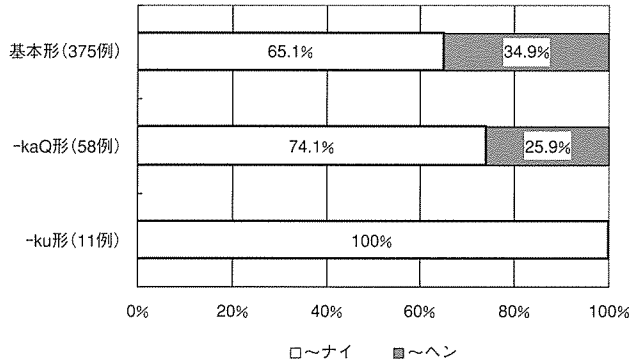

図10 「～ている・～てある」否定表現における否定辞

～てある」相当形式の否定表現では標準語形否定辞が非常に多く用いられている。以下では，用例数の多かった否定辞基本形(375例)に絞って考察を進める。談話から得られた「～ている・～てある」相当形式の否定表現のうち，方言形否定辞を用いたものは131例(34.9%)，標準語形否定辞を用いたものは244例(65.1%)であった。

[(～シ)テナイ] 244例

(66) そう，スーツ　私な　入学式に，着た　やつぐらいしか　モッテナイで｛笑｝。[A20女]

(67) あ　俺かて《俺だって》 教科，国語しか　オシエテナイよ。[A23男]

(68) まだ　航空券とか　カッテナイって　ゆってた｛笑｝。[B22女]

(69) お　俺　マチガッテナイで　やっぱり。 オッサンが　悪いねん。[B19男]

[(～シ)テヘン] 131例

(70) なんか　終わり方とか　キメテヘンやん，よー《よく》 考えたら。[B19男]

(71) あー　夏合宿　イッテヘン。[B21男]

方言形(～シ)テヘンが少ないのには，二つの理由が考えられる。一つめは「動詞テ形＋用言」という構造を持つ表現との対比にみる(～シ)テヘンの特殊性，もう一つは標準語形否定辞ナイの独立性である。日本語には，(～シ)テイク，(～シ)テクル，(～シ)テヤル，(～シ)テモラウのように「動詞テ形＋用言」という表現が多くある。(～シ)テヘンとそれらを対比させた場合，イク，クル，ヤル，モラウなどの補助用言と異なり，否定辞ヘンは単独では用いないので，(～シ)テヘンのみが特殊なものとなる。図11の《A》に並んでいる語を縦に眺めるとそれがよくわかる。

一方標準語では，「ない」は単独で形容詞としても用いられるため，その独立性が高く，(～シ)テイク，(～シ)テクルなどと同じように，分割して，独立したものとして「ない」を取り出すことができる。標準語と方言とを対比させてみると，(～シ)テヘンの特殊性がいっそう明瞭になる(図11)。これが，標準語形(～シ)テナイを受容する素地となったと考えられる。関西方言に

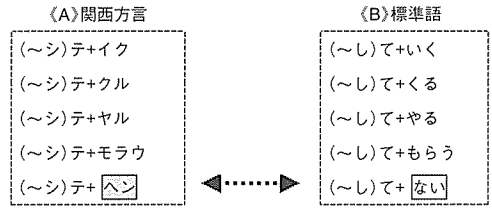

図11　(～シ)テヘンの特殊性と「ない」の独立性

も形容詞のナイが存在するので，(～シ)テナイの使用にはあまり抵抗がなかったのではないだろうか。

また，「～ている」の否定表現の場合，標準語では「(～し)てない」とも「(～し)ていない」とも言うことができるが，関西方言では (～シ)テヘンを (～シ)テイーヒンということは極めて稀である。このように標準語と方言との対応がアンバランスであることも一因と考えられる。さらに，「～てある」の否定表現の場合，(～シ)テナイの多用は，3.4節でみた「アル－アラヘン」から「アル－ナイ」への変化とパラレルに生じたものということができる。いずれにせよ，方言体系内でバランスのとれていないところに標準語との接触が生じ，標準語との対比の中で，より整合性の高い(～シ)テナイが受容されたのだと考えることができる。

4. 若年層の否定辞使用にみる言語変化のタイプ

ここまでは，談話に現れた否定辞の使用実態を具体的に分析し，考察を行ってきたが，本節では，若年層における否定辞の使用状況にみる言語変化のあり方について考えてみたい。まず，3節でみた動詞否定形における否定辞の使用状況についてまとめると，概略次のようになる。

(a)　動詞否定形では，方言形否定辞が圧倒的多数を占めている。

(a-1)　否定辞の基本形でもっともよく用いられる否定辞は，動詞の活用型や拍数にかかわらず，～ヘンである。ただし，従属度の高い従属節や許可・当為などの慣用表現には～ンが用いられる。(3.1節)

(a-2)　-kaQ 形は伝統形を駆逐してタ形やテ形に用いられているが，五段動詞では，～ンカッ-・～ヘンカッ-という二つのバリアントの併存状況から～ンカッ-の多用（あるいは専用）へと移行しつつある。(3.2節)

(a-3)　-ku 形では，～ンク-・～ヘンク-という方言形が新たに誕生している。譲歩節や許可の表現といった固定的な表現は基本形のテ形によって，それ以外の連用用法は-ku 形によって表されている。用例数はまだ少ないが，方言形否定辞 -ku 形の出現によって，否定辞活用体系の特殊型から形容詞型への移行がさらに進むことになる。(3.3節)

(b)　存在動詞「ある」の否定表現は，アラヘン・ナイの併用からナイの専用へと移行しつつある。アラヘンではなくて形容詞ナイが選ばれるのは，標準語との接触によるところが大きい。(3.4節)

(c) 「～ている・～てある」相当形式の否定表現では，方言形の(～シ)テヘンではなく，標準語形(～シ)テナイが多く用いられている。要因としては，(～シ)テヘンの特殊性，ナイの独立性が考えられる。(3.5節)

変化のあり方という観点からみると，(a)～(c)は，①方言体系内部で起きた変化と，②標準語との接触によって起きた変化の二つにわけられる。以下，①について4.1節で，②について4.2節で取り上げる。

4.1. 方言体系内部での変化

3.1節では否定辞の基本形における各バリアントの使用実態について詳しく分析したが，従来の研究で自由変異と扱われることも多かった ～ンと ～ヘンの使用が，音環境や構文的位置によって一方に偏ることが明らかとなった。すなわち，歴史的に見ると新しい形式である ～ヘンが，歴史的に古い ～ンと棲み分けのような形で分布しているケースがいくつかみられたのである。先行研究で簡単にしか触れられてこなかったこの状況を，実際の談話からの量的な分析によって提示できたことには意味があると考える。ただし，～ヘンという否定辞の発生はかなり古く，明治時代中期にまでさかのぼる(金沢 1998:57-71)ため，本稿で指摘した ～ン と ～ヘンの棲み分け的な使用が若年層に特有のものかどうかは疑わしい。それに対して標準語との接触による変化は，-ku 形の出現など新しい動きが見られ，若年層に特徴的なものということができるだろう。

4.2. 標準語との接触による変化

3.2節～3.5節では，標準語との接触によって起こる変化という観点から，否定辞の使用実態について分析を行った。ここではそれぞれの結果に基づいて標準語との接触による言語変化をいくつかのパターンに分類してみたい。

変化のパターンは，〔A〕新しい形式を受容するかしないか，によってまず大きく三つに分けることができる。すなわち，①新形式を受容する，②旧形式との混交形を作る形で受容する，③受容しない，の3種である。本稿で扱った項目をこの3種に分けると以下のようになる(a-1，a-2などは4節冒頭のものと対応。以下同様)。

〔A〕 新しい形式を受容するかしないか

① 新形式を受容する

・ 「～ている・～てある」相当形式の否定表現における(～シ)テナイの受容(c)

② 新形式と旧形式との混交形を作る

・ ネオ方言形 -kaQ 形の誕生(a-2)

・ ネオ方言形 -ku 形の誕生(a-3)

③ 新形式を受容しない（旧形式を維持する）

・ 方言形否定辞基本形の使用(a-1)

さらに，〔B〕受容のしかた(あるいは維持のしかた)に目を向けると，新形式をどのような形で受容するか，旧形式をどのような形で維持するか，混交形をどのような形で方言体系に取り込ん

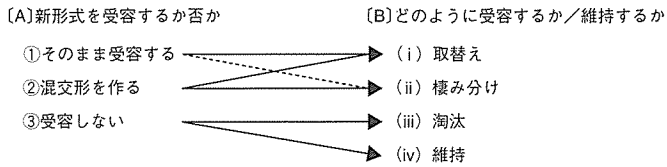

図12　若年層関西方言の否定辞使用にみる言語変化のパターン

でゆくか，という観点から，(i)取替え，(ii)棲み分け，(iii)淘汰，(iv)維持の4タイプを立てることができる。

(i)　取替え：新形式が，旧形式に取って代わる。

・「～ている・～てある」相当形式の否定表現における(～シ)テナイの受容(c)

・ネオ方言形-kaQ形による伝統形～ナンダ・～ヘナンダの駆逐(a-2)

(ii)　棲み分け：新形式が旧形式と意味機能を分担して併存する。

・新しく誕生したネオ方言形-ku形が，従来の形式である基本形と用法を分担する(a-3)

(iii)　淘汰：複数の旧形式が，接触した新形式に合わせるかたちで整理される。

・「ある」の否定表現が，アラヘン・ナイの併用からナイ専用へ移行する(b)

・ネオ方言形-kaQ形における「五段動詞＋ンカッタ」の多用(a-2)

(iv)　維持：旧形式をそのまま使用する。

・方言形否定辞基本形の使用(a-1)

(i)(ii)は，上の「①新形式の受容」「②混交形式の形成」に見られるタイプで，(iii)(iv)は「③旧形式の維持」において見られるタイプである。ここでネオ方言形-kaQ形に関わる事象を(i)(iii)両方の例として挙げているが，これは「新形式」「旧形式」が比較対象によって決まる相対的なラベルであることによる。-kaQ形は，伝統形と比べれば「新形式」だが，若年層ではすでに定着している形式であり，標準語形と比べれば「旧形式」ということができる。なお，(i)(ii)の用語は徳川(1978:40-45)から援用したものである。

3節の分析結果から見て，若年層における標準語との接触による否定辞の変化は〔A〕〔B〕二つの手続きを踏んで行われるといえる。これを図式化すると，図12のようになる。

図中の，点線で示した「①そのまま受容する→(ii)旧形式と棲み分ける」というタイプについては今回詳しく触れなかったが，表2の《2》に示した「独自の意味機能を持って用いられる標準語形～ナイ」の例などはこれに該当しよう。この3種4タイプ(組み合わせでは6通り)の変化パターンは，否定辞だけでなく，方言語彙の衰退や他の文法項目における変化など，標準語との接触によって起こるさまざまな事象にあてはめることができるものと思われる。

5. まとめと今後の課題

本稿では，否定辞の使用実態を詳細に分析し(3節)，そこから，方言体系内部で(他の言語変種との接触によらずに)起こった変化，および標準語との接触によって起こった変化について考察を行った(4節)。標準語との接触によって起こった変化については，「新形式を受容するか否

か」,「新形式をどのように方言体系に取り込むか(あるいは旧形式をどのように維持するか)」という二つの観点によって，3種4タイプの言語変化パターンを導き出した(4.2節)。今後は，本稿で示したパターンが他の言語事象においてもあてはまるかどうかを検証することが必要である。

形式面に着目すると，関西若年層の話しことばにみられる方言要素は極めて限定されているが，それにもかかわらず話し手は自らのことばを「方言」と認識している。それには音調が大きな役割を果たしているようである。今後は，形式面における事象とアクセント面の事象をつき合わせ，若年層にみる言語変容のメカニズムを包括的に捉えたいと考えている。

注

1 実際の結果からも，若年層の否定辞使用に明確な地域差は認められなかった。

2 関西方言では，～テアル(～タール)の使用される範囲が広く，標準語で「～ている」しか使えない場合にも ～テアルが使われうる(郡 1997:33-35)。～テアルの否定表現には ～ターレヘン(<～テアレヘン)があるが，今回の談話資料には現れなかった。

3 ～ナイ・～ン・～ヘンの他，～ヤン，～ネーという否定辞が3例得られた。～ヤンは五段動詞以外につく否定辞で(山本 1982:222)，タベヤン(食べない)，コヤン(来ない)，シヤン(しない)，という形で否定形となる。談話中の使用例は次の2例であった。

(1) えー，まだ コヤンでええ《＝来なくていい》，涼しいから ええわ。[B19男]

(2) いや そこまでー シヤンでもー《＝しなくても》とか，思うねんけどな。[B22女]

～ネーは，標準語形ナイの二重母音 /ai/ が融合して /eː/ となったものだが，劇中人物の台詞を引用したと思われる例であるので，例外とすべきものと思われる。

(3) 「そんな こと ゆわれても 俺は 結婚デキネー《＝出来ない》」て ゆって，[B22女]

4 得られた用例38例の内訳は，～ナイ3例，～ヘン35例である。ちなみに，同じ環境における一段動詞以外の動詞の否定形では，170例中 ～ナイが8例，～ンが58例，～ヘンが104例であった。

5 例文の後の［ ］内には談話情報を示す。最初のアルファベットは2.1節で述べた「データの種類：A・B」，続いて「当時年齢」「性別」である。発話文中の《 》は共通語訳，［ ］は話題に関する補助情報，｛ ｝は笑いなど非言語行動を示す。

6 真田・岸江(1990)は老年層～若年層の調査だが，本研究と同じく若年層の調査である真田(1988)や宮治(1995)と本研究とで結果に違いが出るのは，調査方法によるところも多いと思われる。但し，真田(1988:36)では，アンケート調査であっても神戸市の若年層(当時17～23歳)は ～ヘンカッタより ～ンカッタを多用するという結果になっており，標準語の干渉の可能性が指摘されている(真田 1988:45)。今回のデータでは，話者の出身地にかかわらず，五段動詞における～ンカッタの多用が見受けられた。

参考文献

楳垣実編(1962)『近畿方言の総合的研究』三省堂.

金沢裕之(1998)『近代大阪語変遷の研究』和泉書院.

郡史郎(1997)「大阪方言の特色」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫

編『日本のことばシリーズ27　大阪府のことば』11-61，明治書院.
真田信治(1987)「ことばの変化のダイナミズム——関西圏における neo-dialect について」『言語生活』429，26-32，筑摩書房.
真田信治(1988)「関西中央部の若年層における言語使用の動向」徳川宗賢編『関西方言の動態に関する社会言語学的研究』33-46，大阪大学文学部.
真田信治・井上文子・高木千恵(1999)『関西・若年層における談話データ集』文部省科研費成果報告書（大阪大学文学部・真田信治).
真田信治・岸江信介(1990)『大阪市方言の動向—大阪市方言の動態データ—』文部省科研費成果報告書（大阪大学文学部・真田信治).
渋谷勝己(1998)「社会言語学のキーテーマ４　言語接触」『言語』27(4)，116-121，大修館書店.
高木千恵(1998)「若年層の関西方言における否定辞の使用実態—カジュアルな場面での談話を資料として—」『日本方言研究会第67回研究発表会発表原稿集』41-48，日本方言研究会.
高木千恵(1999)「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて—談話から見た使用実態—」『現代日本語研究』６，78-99，大阪大学文学部日本語学講座.
高木千恵(2000)「大阪方言におけるテ形について—形容詞・名詞述語・動詞否定形式のテ形(相当)形式—」『阪大社会言語学研究ノート』２，47-62，大阪大学文学部日本語学講座社会言語学研究室.
高橋太郎(1974)「標準語の動詞と京都弁の動詞」『言語生活』270，14-27，筑摩書房.
徳川宗賢(1978)「単語の死と生・方言接触の場合」『国語学』115，40-46，国語学会.
西宮一民(1962)「奈良県方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』301-364，三省堂.
前田勇(1955)「大阪方言における動詞打消法」近畿方言学会編『東条操先生古稀祝賀論文集』近畿方言双書１，297-322.
宮治弘明(1995)「大阪市の若年層における方言の動態」『梅花女子大学文学部紀要（国語・国文学)』29，51-66，梅花女子大学文学部.
村内英一(1962)「和歌山県方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』365-420，三省堂.
山本俊治(1982)「大阪府の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学７—近畿地方の方言—』195-228，国書刊行会.

付　記

本稿は，第76回変異理論研究会(1998.7.27，長野県小諸市)および第67回日本方言研究会(1998.10.16，九州大学)における口頭発表をもとにまとめた修士論文の一部を修正・加筆したものである。談話収集にご協力頂いた方々，本稿をなすにあたって貴重なご助言を下さった諸先生・諸先輩方に，記して感謝申し上げる。

（投稿受理日：2004年１月９日）
（改稿受理日：2004年７月21日）

高木　千恵（たかぎ　ちえ）
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程
takagic@myrealbox.com

Japanese Linguistics 16(October, 2004) 25–46 〔Article〕

The types of language change in Kansai dialect:
Observed in the usage of three negative suffixes in the young generation

TAKAGI Chie
(Graduate Student, Osaka University)

Keywords
Kansai dialect, negative suffixes, neo-dialect forms, types of language change

Abstract

Young speakers of Kansai dialect have three variants of negative suffix, *-nai*, *-n*, and *-hen*. *-Nai* is from standard Japanese and the others are originally from Kansai dialect, but their rules of usage have not been investigated well. In this study, we used the quantitative analysis of transcripts and found the following:

(1) In the basic form of negative verb, *-n* is almost exclusively used in concessive and conditional clauses and in the expression of permission, and *-hen* is used in other syntactic environments.

(2) In the *-kaQ* form of negative verb, neo-dialect forms *-n-kaQ(-ta)* and *-hen-kaQ(-ta)* replaced traditional forms, and *-n-kaQ(-ta)* is more prevalent to *-hen-kaQ(-ta)* in numbers.

(3) In the -ku form of negative verb, new neo-dialect forms *-n-ku(-te)* and *-hen-ku(-te)* are produced after the standard Japanese paradigm.

(4) The adjective nai 'non-existent is gradually replacing the negative verb form ara-hen 'non-exist' as the negative expression of the substantive verb aru 'exist'.

(5) In negation of *-te-iru* and *-te-aru*, there are a greater number of examples of the standard Japanese form *-te-nai* than that of Kansai dialect form *-te-hen*.

These facts suggest two steps of language change in the contact situation. First, speakers decide to accept or not to accept new forms in three ways; (A) the acceptance of new forms, (B) the production of neo-dialect forms by contamination, or (C) the maintenance of traditional forms. Second, they choose how to accept or maintain those forms from four types; (i) the replacement of traditional forms, (ii) the sharing of functions with them, (iii) the stable maintenance of traditional forms, and (iv) the maintenance of selections from several traditional variants.